
夏の詩～誓いが守れなくても～

U-Ton

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の詩〜誓いが守れなくても〜

【Nコード】

N7930H

【作者名】

U-Ton

【あらすじ】

高校野球を見ていて突発的に書いてしまいました。さつらと読めます。

カーン

白球が空へと飛ぶ。

九回表。スコアは三対一。ノーアウト満塁。バッターは相手の四番。最高の場面で最高の相手だ。いや、だった。男と女。そんなのは関係なく楽しめた。

私はキャッチャーである山口の要求通り最後の一球、つまりは今相手が打った球を投げ込んだ。

白球が外野手の頭を越え走者が三人帰ってくる。

走者一掃のタイムリーツーベース。

私はよく頑張った。頑張ってここまでたどり着いた。私はそう割り切る事によつて、スコアボードの9の下についた3をみて、あふれそうになつた涙を手で拭いた。

野球という九対九でやるスポーツを始めたきっかけは幼なじみの慧の影響だった。

幼稚園の時から慧は野球が好きだった。そして、そんな一生懸命な慧の姿をみて私も興味を持った。

まあ、最も慧のことが小さいなりに気になっていたのは事実だし、慧との話題をつくるために野球を始めたのは事実だ。でも、時がたつにつれて私は本当にこのスポーツにのめり込んだ。たった一つのボールを九人の仲間と共に追いかける。その感覚が非常に愉快だった。

初めはみんなが「なんで女が野球やっているんだよ」と私に対して冷たかった。

でも、私はそう見下す奴の何倍も努力し、ついには栄冠の背番号1を手に入れた。

中学になつても、高校になつても続けた。

変化といえば小学校のころキャッチャーだった慧がエースナンバーを私から奪い私が他のポジションになった事ぐらい。

ま、まあ、あと私達の初恋が実ったこともあるけど・・・

とにかく、慧も私と一緒に頑張った。

毎日遅くまで投げ込み、バットを持ち、そしてお互いにノックを打ち合った。

中学卒業の時すでに全国に名が知れ渡っていた慧は全国でも有数の野球の強い学校にも誘われたが断った。

そして、私と同じ地元の共学校に入った。小学校の頃からの仲間も何人か野球の強い高校に誘われたんだけど、慧に誘われて地元の高校に入った。

私は慧と一緒にの学校に来てくれるのが嬉しく、またみんなと野球がやれるのが嬉しかった。

それと同時に、私のせいで慧は甲子園のチャンスを逃してしまうのではないかと心配した。

慧にそのことを言ったら「だったらお前が連れてってくれ」と言い私はそれもそうだと思い、それまでよりももっと努力した。

そして二人で頑張つて得られた結果は甲子園。一昨年の夏・・・そうこの戦いを勝ち抜いて。

私がキャッチャーマスクをかぶり、慧が白球を投げる。

そんな当たり前の光景が甲子園の初戦で崩れた。

相手の二年生バッターである彼が打った打球は慧の頭を正確にとらえた。

慧も危険を感じてしゃがんだのがいけなかった。

結局、私達は三年生には悪かったが、慧容態が心配で甲子園の初戦を棄権した。みんな、ただ生きていてくれと願うだけだった。

でも、現在第二百十八会甲子園大会が行われる今まで慧は目覚める気配すらない。

死んではない。でも生きているかも微妙だ。

だから、私は慧がもうかえってこないかも知れないと悟った日、目を覚まさない彼の顔を撫でながら・・・誓った。

もう一度甲子園に行く。私が慧の代わりにあいつを抑える、と。

このことは別に慧が望んでいるわけではない。いわゆる私の復讐であり・・・そして願掛けでもある。

望みはないが、もしかしたらそれがかなえられたのなら・・・彼はかえってくるかも知れない。

■ ■ 県夏の地方大会決勝。そして、その先にあの日慧を植物状態にしたあのバッターを四番に据えたあの高校がある。

・・・思い出した。負けるわけにはいかないんだ。

九回裏。バッター9番私。背中にある十番の背番号。去年は二番だった。そして、背番号一番は慧だ。

だって、例え投げれなくなっていたとしても私達のエースは彼しかない！！

二千百××年、■ ■ 県夏の地方大会決勝。僕は久しぶりに動かしたらしい腰をさすりながらついていたテレビを見た。

さつき目覚めたばかりの僕は一年間眠り続けていた、ということが信じられなかったが、今■ ■ 県夏の地方大会決勝という番組を見て本当に一年後だということに、ただただ、驚いていた。

そして、テレビに映っている仲間に驚いた。今年も頑張ってくれて

いると。そして、テレビの解説者によってみんなが自分のために背番号1を残してくれていることを知った。

あつ・・・今試合が終わった。

みんなが涙を流している。よくみんな頑張ってくれたよ。

今まで迷惑かけたね。ぼくは看護婦さんから百円を借りると廊下の公衆電話に向かった。

P R R R R

私の携帯電話がなる。こんなタイミングで電話を掛けてくるのは誰？
私は荒っぽく電話に出る。

「もしもし」

「もしもし。久しぶり。そして、ありがとう」
どこかで聞いた事のある口調で彼はしゃべってきた。だから、私がしばらく口を聞かなかった私がこう言ったのも無理はないと思う

「あの、どちらさまですか」

私は甲子園に行けなかったけど大きなものを取り戻せた。

「おまけ」

「慧。そういえば、どうしよ」

「何を？」

あの日から2日がたった。私は慧とずっと一緒にいた。

すこしでも離れると、どこかにいってしまうような予感がしたのだ。

でも、今はもつとヤバいことがある。

「負けたとき向こうの応援団長にあなたの写真渡しちゃった」

「は？」

「つまりね・・・甲子園の応援席にあなたの写真を掲げてくれ、て頼んじゃった」

「・・・ええつと。つまり？」

「あの高校が勝ち続ける限りあなたの写真が・・・」

「僕は故人かよ?! じゃなくて取り返さないと!!」

「無理よ。せいぜい一回戦で負けてくれるのを祈りましょう」

結局私達が負けたチームは甲子園の決勝まで進んで慧の写真も甲子園の決勝戦まで応援席に置いてあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930h/>

夏の詩～誓いが守れなくても～

2010年10月20日17時32分発行